６月上旬の美しい季節のこの佳き日に、私たち 2010 年度、2019 年度卒業生・修了生のためにこの会を開いてくださった大学の関係者の方々に心より感謝申し上げます。また、この卒業生の集いにご臨席いただきました皆様に御礼申し上げます。

改めて、2023 年、大東文化大学の 100 周年事業の一環として、遅れてとはいえ、卒業式を迎えることができたことを嬉しく思います。2019 年度の卒業式が開催されなかったことは、大きな喪失感をもたらしました。しかし、それを取り戻せたことは、心に大きな喜びをもたらしました。

私は、希望と不安を胸に、この大東文化大学の門を叩きました。東松山と板橋の２つのキャンパスから成る広い敷地と建物に圧倒されました。初めは、右も左もわからず、無我夢中に毎日を過ごしました。そんな私が、無事今日を迎えることができたのは、ひとえに、大東文化大学と、親身になって向き合って下さった大切な方々のおかげであるといえます。

大学に入学し、最初に実感したことは、「自己の無知」でした。法学部に入学したものの、今まで法律を学んだことがなかったため、どのように条文を読むのか、授業や教科書で使用される専門用語や概念について全く理解できず、試行錯誤の毎日でした。しかし、先生方は、質問にも快く引き受けていただき、つまずかずに前進するために時間を何度も割いて下さいました。また、大学では多くの優れた仲間に出会うことができました。同じように初めての経験に直面しており、お互い助け合いながら成長していくことができました。共同で勉強会を開き、難しいトピックを共有し、お互いに切磋琢磨した日々はかけがえのない時間となり、面倒見の良い先輩方、同期、後輩との交流は、大学生活をより楽しく、充実したものにしてくれました。

一人ひとりの卒業後の道は異なりますが、私の大学卒業後の道は決して順調とはいきませんでした。私は、卒業後に法科大学院に進学しました。進学後多くの困難に直面しました。法科大学院でのタスクは、日々変わり、授業は、ソクラテス・メソッドという双方向の授業が展開されます。そのため、多くの予習をしなければ授業についていくことができなくなります。学習をする中で、時間の制約、能力の不足、そして周囲とのレベル差に日々苦しみましたが、決して諦めることはありませんでした。この過程で経験した紆余曲折は、貴重な学びの機会となりました。それは、成功に繋がる唯一の道ではなく、自分自身を成長させるための重要な一歩であったと気づかされました。

私は現在、法律事務所で働きながら司法試験を目指しています。司法試験への受験を諦めることなく、夢を追い続ける覚悟を持っています。この決断は重要な一歩であり、法律の世界で自己を証明するための道でもあります。法律を扱う実務の世界に

身を置くことで、知識を深め、法律の専門家としてのスキルを磨くことができます。厳しい勉強と努力を積み重ねながら、将来的に司法試験に合格し、社会において正義を追求する一員となることを目指しています。

こうした挑戦を続ける理由は、ただ私自身の目標を実現したいという気持ちには留まりません。目標は、目標に向けて挫折を経験しても、乗り越えることができると、現在大東文化大学で学んでいる学生の皆さんはもちろん、今後入学を考えている全ての受験生に勇気を与えられる存在になりたいからです。

大東文化大学の在校生、大学を目指す学生の皆さん、受験や学校での勉強や生活に日々充実した毎日を過ごされていると思います。今真剣に打ち込んでいるものがあればそれを継続してみて下さい。また、これから進む道標を模索している最中である場合は、まずは、目の前の試験、発表でもいいと思います。そのままで日々試験勉強に限らず何か夢中になれるものを1つ見つけて下さい。1つのことに真剣に取り組んだ経験は、必ず皆さんの強みとなって力を発揮すると信じています。

また、卒業、修了された皆様方におかれましても、大学で学ばれたことを活かして、社会で各々活躍され忙しい日々を過ごされていることと推察します。また、その行先には、解決すべき問題が山積みになっていると思います。私たちは、大東文化大学で学んだそれぞれの専門分野を活かし、協働して問題に対処していくことで、社会的な課題を改善していくという使命があります。そのため、今後も、さまざまなことを学び、より一層の努力をしていくことを誓います。

最後になりますが、これまでご指導下さいました諸先生方、学生生活を支えて下さった職員の皆様、そして家族や友人からの温かな応援に改めて感謝を申し上げるとともに、大東文化大学のご発展と卒業生ならびにご臨席の皆様のご健勝とご活躍をお祈りいたしまして、答辞とさせていただきます。

令和5年6月3日

小林昌平（こばやし　しょうへい）